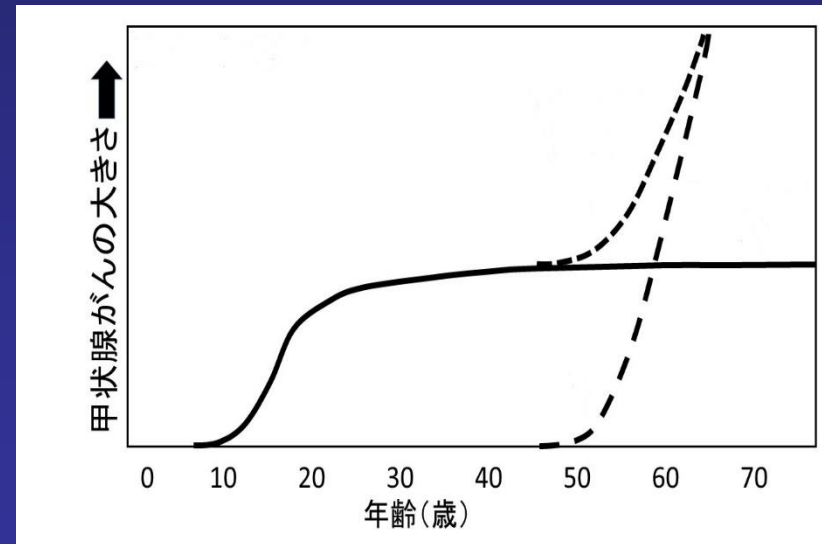


甲状腺がんの自然史(若年型甲状腺がん)

- ① 甲状腺がんの大部分は子どもの頃にできている。
- ② 子どものころは活発に増殖し派手に転移もするが、治療の反応性が良い(どんどん悪くならない)ので命を取られることはまれ。
- ③ 今までは大きなしこりになってから発見されていた。

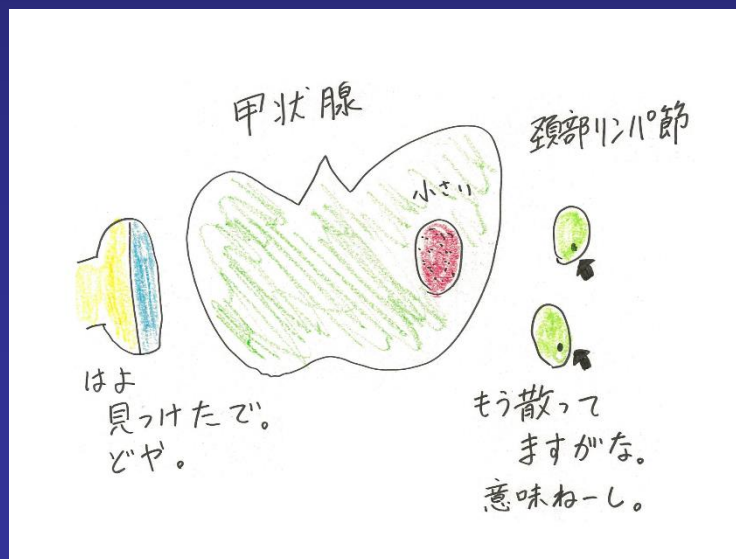
それでも予後は良好。

- ④ ほとんどが一生悪さをしない。
- ⑤ 早期診断・早期治療が
ふさわしくないがんの典型。



甲状腺超音波検査の功罪(利益はなく害がある)

- ① 超音波検査で甲状腺がんを早期に見つけてもその後の経過が改善するわけではない。すなわち、子どものためになるからと考えて受けさせるのは間違い。
- ② 一定の確率(35歳になれば200人に1人)で過剰診断の被害にあう。
- ③ あくまで親の安心のための検査、子どものための検査ではない。
- ④ あくまで苦肉の策、県民の健康改善のための検査ではない。



甲状腺がんの過剰診断

- ① 放射線による健康被害の発生が科学的に否定されている以上、福島の子どもの甲状腺がんのほとんどは、本来見つけるべきではない無害ながんを掘り起こした過剰診断である。
超音波検査中止が唯一の解決策。
- ② 科学的・医学倫理的に正しいやりかたにできるだけ近づける努力を。
- ③ 過剰診断は悲惨。
福島の子どもの未来を奪う。
- ④ 経過観察はもっと残酷。



福島県民健康調査は今後どうあるべきか

- ① 2011年に甲状腺超音波検査を開始したことは仕方なかった。
しかし被害を拡大しないよう方向転換を図る時期に来ている。
- ② 最低限、子どもの人権は守らなければならない。
 - ・甲状腺超音波検査の弊害について十分に伝える。
 - ・学校検診での強制性の排除
- ② 放射線影響の調査方法がどうあるべきかを議論すべき。
健康被害の調査が健康被害を出しては本末転倒
- ③ 不安の解消について、子どもに被害を与えない方法を模索すべき。個人的には、まず超音波検査ありきでなく、触診・問診を優先する本来の診療体制に戻すべきであると考えている。

福島の子どもの未来を守るための3つの提言

① 発信する

専門家は今こそ口を開くべき

科学を語ることをやめてはいけません。

過剰診断を語ることは誰かを非難することではありません。

② 学ぶ

福島のお父さん・お母さんは子どもを守るため学んでください

キーワードは

「甲状腺がんの自然史」「過剰診断」

「甲状腺超音波検査の功罪」

③ 守る

立場を超えて、子どもを守ることで一致しましょう

“大人の事情”で子どもの健康を損ねてはいけません。